

金光明經如来寿量品の発展過程より見た 如来の寿命と遺骨

鈴木 隆 泰

1. 本稿の目的

仏陀・如来である釈尊の入滅から、大乘仏教が興起して発展するまでに至る過程に対して、われわれは現在、

創唱宗教である仏教にとって、開祖である釈尊は教えの正しさを証明するために、滅後においても何らかのかたちで現存し続けなくてはならなかった。初期仏教における仏陀の現存確認は、仏陀の本質を仏陀の説いたことば・教え・dharmaに求める流れと、人格としての仏陀の存在自身に求める流れの二つに分類される。前者は出家者の瞑想手段として用いられるようになり、後者は遺骨崇拜・仏塔信仰へと連なっていた。そして、ことばを大切にしながらも、瞑想手段としてのことばや、単なる仏塔信仰には飽きたらず、詩や物語としてのことばに親しみをもち、ことばの上に仏教全体を投影しようとして大乘仏教が誕生した。

初期大乘仏教の目標の一つは仏塔信仰からの脱却であったが、仏塔信仰は大乘仏教誕生の土台ともなっており、その土台自体を完全に否定することはできなかった。仏塔信仰からの完全な脱却表明は、より発展した大乘経典において初めてなすことが可能となった。この脱却表明の背景には、単にそれが大乘仏教興起以来の目標であったということのみならず、大乘仏教の誕生・発展にも関わらず依然として根強く残っていた仏塔信仰に対する強い対抗意識のあったことが考えられる。

という論理の枠組みを有している⁽¹⁾。

中期大乘經典の一つである『金光明經 *Suvarṇaprabhāsa*, *Suv*』の第二章「如来寿量品 *Tathāgatāyuhpramāṇanirdeśaparivarta*」には、現存最古の漢訳一本 (*Suv_{CI}*) を除き、仏塔信仰からの完全な脱却表明が見られる。筆者はこれまでに『金光明經』と『大雲經 *Mahāmeghasūtra*, *MMS*』との考察を通じて、『金光明經』「如来寿量品」に見られる仏塔信仰からの脱却表明の出典が、如来常住を主題とする『大雲經』であることを明らかにした⁽²⁾。

本稿ではその成果に基づき、仏塔信仰からの脱却表明を含めた『金光明經』「如来寿量品」の総体へと考察対象を拡げ、仏陀の現存確認に深く関わる仏陀・如来の寿命と遺骨に関する観念が、『金光明經』「如来寿量品」にとってどのような意味をもち、また、その増広発展にともなってどのように遷移してきたのかを、先述した論理の枠組みに留意しながら探っていくこととする⁽³⁾。

2. 「金光明經」 「如来寿量品」 の構成

まず『金光明經』「如来寿量品」の総体の構成を示し、表1に内容対照表を掲げる。

① 妙幢菩薩の仏寿に関する疑念と四如来の登場

王舎城に住む妙幢⁽⁴⁾菩薩が、長寿のはずの釈尊が八十歳で入滅することに疑問を抱き如来を念ずると、奇特が生じ四方に四如来（不動、宝相、無量寿、天鼓音⁽⁵⁾）が現れ、衆生は種々の利益を受ける⁽⁶⁾。

② 仏寿不可量

釈尊の短寿に疑念を抱く妙幢に対し、四如来は、如来の寿命を思議することができるのは如来のみであると答え、釈尊の寿命を量ることはできないという偈を説く⁽⁷⁾。

③衆生を成熟させるための釈尊の涅槃示現

妙幢は四如来に、釈尊があえて短寿を示現する理由を問う。四如来は、釈尊が入滅を示現するのは衆生を成熟させるためであると譬喩を援用して答える⁽⁸⁾。

④常に靈鷲山に在る釈尊

妙幢ら一行は靈鷲山に在る釈尊に詣でる。釈尊は、自分は常にこの靈鷲山に在って法を説いており、涅槃の示現は衆生を成熟させるためであると答える⁽⁹⁾。

⑤如来の遺骨に関する対論

会衆の中のカウディニヤ婆羅門が、舍利供養で生天を得ようと釈尊の遺骨を望むが、釈尊は黙して語らない。すると仏陀の威力を受けた一切世間楽見童子が、如来の遺骨は決して存在しないという偈を説き、遺骨崇拜・仏塔供養の意義を完全に否定する。カウディニヤ婆羅門は歓喜し、如来の遺骨は存在せず、如来は法身であって教法こそが如来の遺骨であり、涅槃の示現は衆生を成

	<i>Suv_{C1}</i>	<i>Suv_S, Suv_{T1}</i>	<i>Suv_{C2}</i>	<i>Suv_{T2}</i>	<i>Suv_{C3}</i>
①	○	○	○	○	○
②	○	○	○	○	○
③			○	○	○
④			○	○	○
⑤		○	○	○	○
⑥				○	○
⑦				○	○

表1 金光明經如来寿量品の内容対照表

熟させるための手段であったという偈を説く。天子たちがこれを讚歎する⁽¹⁰⁾。

⑥涅槃の十法

妙幢が釈尊に、如来の遺骨が存在しないにも関わらず、なぜ經典中に遺骨崇拜を勧める言葉があるのか、なぜ過去仏の遺骨があるのかを質問する。釈尊は三種の十法が涅槃にあることを示し、涅槃が釈尊の死だけを意味するのではないと再解釈を加える⁽¹¹⁾。

⑦如来の十行

如来が涅槃しない（死なない）ことだけが希有なのではなく、さらに驚嘆すべき十種の行いが如来にはあることを示し、最終的には、⑤で否定したはずの遺骨崇拜を再び奨励している⁽¹²⁾。

3. 「如来寿量品」の増広発展過程とその意義

仏陀の現存確認方法⁽¹³⁾に注意を払いながら、「如来寿量品」の増広発展過程とその意義を考察していくこととする。

現存最古の *Suv_{Cl}* によれば、「如来寿量品」の当初の内容は、

- ①「長寿のはずの釈尊がなぜ短寿なのか」
- ②「釈尊の寿命は無量である」

というものであった。以下、この①と②を〈第一段階〉と呼ぶことにしよう。

次に確認される増広発展過程は、*Suv_s*、*Suv_{Tl}* 以降より表れる、

- ⑤「如来には遺骨がなく、涅槃は衆生を利益するための手段である。如来は法よりなる身体を有しており（法身）、教法こそが如来の遺骨である。この真実を明かした以上、これ以降の遺骨崇拜・仏塔供養は無意味である」

という部分である。この⑤を〈第二段階〉と呼称する。

〈第三段階〉は *Suv_{C2}* 以降に表れる、

- ③「釈尊の入滅示現は衆生を成熟させるための手段である」
④「釈尊自身も③を承認し、常に靈鷲山に在って教えを説くも、衆生を成熟させるためには涅槃すら示現すると自ら宣言する」
である。

最後は Suv_{T2} 、 Suv_{C3} のみに確認される、

- ⑥「涅槃の再解釈」
⑦「驚嘆すべき様々な如来行を列挙した後、再度遺骨崇拜・仏塔供養を奨励する」
という **〈第四段階〉** である。

3.1. **〈第一段階〉 (①②)**

この段階では単に「如来の寿命は無量である」というかたちで仏陀の現存確認を行っているのみである。②において四如来が、釈尊の短寿に疑念を抱く妙幢菩薩に対し、

善男子よ。“釈迦牟尼世尊の寿命の量はそのように〔八十年と〕短い”
と考えてはならない。それはなぜかと言えば、善男子よ。諸々の如来応供等正覚を除いては、天・魔・梵天を含んだ世間や沙門・婆羅門・天・人・阿修羅を含んだ人々の中で、釈迦牟尼世尊如来の寿命の量の限りを、後際までかかったとしても了知できる者を私たちは知らないからである⁽¹⁴⁾。

と告げた後、八偈をもって釈尊の寿命の不可量性を強調する。一偈のみを引用すると、

全ての大海に水が何滴あるのかを数えることができたとしても、釈迦牟尼の寿命を量ることは誰にもできない⁽¹⁵⁾。

八偈が説かれた後、 Suv_{C1} は以下の記述をもって「如来寿量品」を終了している。

その時妙幢菩薩大士は、如来の寿命が無量であると四如来が説いたのを

聞き、心から信解し歡喜踊躍した。この如来寿量品が説かれて、無量無辺無数の衆生は無上正等覺に向けて発心した。時に四如来は忽然と姿を消した⁽¹⁶⁾。

この〈**第一段階**〉に見られる仏陀の現存確認方法と類似のものが、「如来は常人よりも寿命がはるかに長い」というかたちで、パーリ涅槃經中にも確認される。

アーナンダよ。如来は四神足を修習し、大いに修習し、車のように修習し、家の礎のように堅固にし、実行し、積み重ね、見事に努力した。もし望むなら、如来は寿命のある限り（あるいは、非常に長い間）この世に留まることができるし、あるいはそれよりも長くこの世に留まることができるのである⁽¹⁷⁾。

3.2. 〈**第二段階**〉 (⑤)

〈**第二段階**〉に至って、『金光明經』は『大雲經』からコンテクストを借り受け、如来の遺骨に関する問題に言及する。如来の滅後にその遺骨を仏陀と考えて、遺骨に仏陀の現存を確認し、遺骨崇拜によって多くの福を得るとする見方は、やはり非大乘系涅槃經に確認されるものである⁽¹⁸⁾。また、それはまさしく初期大乘仏教が乗り越えようとした仏陀觀でもあった。例えば増一阿含經には、

如来の身体は金剛のようである。この身体を砕いて芥子粒ほど〔の遺骨〕にして世間に広く行き渡らせよう。そうすれば、未来（如来滅後）の篤信者は如来の姿・形を見ることはできなくても、これ（如来の遺骨）を供養することができるだろう。これを供養すれば、四姓家、四天王家、三十三天、……自在天、他化自在天に生まれるという福德も得られるだろうし、また、……阿羅漢や辟支仏にもなれるだろう。もし仏陀となることができたとしても、それもやはりこの〔遺骨供養の〕おかげなのである⁽¹⁹⁾。

と、「如来としての遺骨」を供養するよう奨励する記述が見られる。

さて、「如来寿量品」の〈第二段階〉では、冒頭に会座のカウンディニャ婆羅門が世尊を礼拝した後、世尊に賜物を懇請するが世尊は黙して語らない。その時、仏陀の威力を受けたリッチャビ族の一切世間樂見童子が、世尊に代わってカウンディニャ婆羅門の要請を聞く。

リッチャビ族の童子よ。世尊を供養するため、私は今、芥子粒ほどの世尊の遺骨が欲しいのだ。……芥子粒ほどの遺骨を供養すれば、三十三天の主になれると言われている。……私は、速やかに三十三天の主になれるという賜物が欲しいのだ⁽²⁰⁾。

要請を聞いた一切世間樂見童子は、世尊の遺骨の不可得性を強調し、遺骨・仏塔供養の功德を完全に否定する十三偈を説く⁽²¹⁾。歡喜したカウンディニャ婆羅門は、如来が法よりなる常住な身体を有していること、如来には遺骨はなく遺された教法こそが遺骨であることを、八偈をもって述べる⁽²²⁾。さらに会衆の天子たちが、如来は常住であり、涅槃の示現は衆生を利益するための手段であるという二偈を説いて、童子と婆羅門を讚える⁽²³⁾。

以上見てきたように、この〈第二段階〉では〈第一段階〉での「如来の寿命は無量である」に続いて、仏陀の死と密接に関係する遺骨が話題となっている⁽²⁴⁾。如来の寿命が無量であれば、当然その遺骨も存在しないことが道理であり、『金光明經』が遺骨の存在を否定する『大雲經』のコンテクストを利用した直接的な理由もそこにあると考えられる⁽²⁵⁾。

もっとも、經典編纂時の現実問題として、釈尊はすでに入滅しており、世の中に遺骨が存在するのも事実である。そこでこの〈第二段階〉では、

身体に骨も血もないのであるから、どうして〔如来の〕遺骨が存在し得ようか。ただ衆生たちを利益するための手段として、仮に遺骨を留め置かれたに過ぎないのである⁽²⁶⁾。

仏陀は般涅槃せず、教えが減びることもない。衆生たちを成熟させるた

めに般涅槃を示現するのである⁽²⁷⁾。

と、仏教における聖典解釈法の伝統に則って⁽²⁸⁾、「涅槃及び遺骨の真意を明かす」というかたちで、涅槃・遺骨を否定している。法よりなる身体を有する常住な如来、及び遺された教法に仏陀の現存確認を行っているのが〈第二段階〉であると言える。

3.3. 〈第三段階〉(③④)

〈第三段階〉は位置的には〈第一段階〉と〈第二段階〉の間に挿入されている。〈第二段階〉で「涅槃の示現は衆生成熟のための手段」と説かれたが、何度も繰り返すように〈第二段階〉自体は本来『大雲經』内部のコンテキストであったため、『金光明經』にとっては衆生成熟の具体的理由・事例が欠けてしまう結果となった。〈第三段階〉が増広された第一の理由は、この衆生成熟の具体的理由・事例の提示であったと考えられる。内容的にも遺骨には触れず、釈尊の涅槃示現をテーマとしているため、〈第三段階〉であるにも関わらず、如来の寿命の無量を扱った〈第一段階〉の直後に挿入されたのであろう。また、〈第二段階〉までの発展であった Suv_s と Suv_{TI} においては、その発展次第が『大雲經』からのコンテキストの借用・移動であったため、『金光明經』内部の脈絡で「登場人物の問題」と「文脈の齟齬」を引き起こしていた⁽²⁹⁾。しかし、この〈第三段階〉以降では、④で教えを説く如来が四如来から釈尊に交代していることなどの効果で、上記の二つの問題がかなりの部分解消されている。よって、この事実も〈第三段階〉の発展が〈第一段階〉と〈第二段階〉の間に行われた大きな理由の一つと考えられる。

さて、〈第一段階〉である①②が終わった時点で、如来の寿命が無量であることを知った妙幢菩薩であるが、無量の寿命を持つ如来がなぜ短寿を示現したのかに疑問を抱き、再度四如来に質問する。四如来は釈尊が短寿を示現した理由として、様々な邪見を抱く衆生たちを利益し、さらに外道の者たちに正見を

生じさせ菩提を得させるためであることを挙げた上で、次のように説明する。

さらにまた善男子よ、かの如来（釈尊）は涅槃を示現することによって、衆生たちに〔如来は〕得難く会い難いという想いや憂苦の想いなどを生じさせる。そうすれば、仏陀世尊の説かれたこれらの經典を速やかに受持し、読み、理解し、他の者たちにも広説し、誹謗することがないであろうから、それ故に如来は短い寿命を示現されたのである。

もし如来が常に在って涅槃しないとしたら、衆生たちは〔如来を〕尊重する気持ちを失い、会い難いという想いも起こさず、如来の説かれた甚深な經典を受持し、読み、理解し、他の者たちにも広説しないであろう。それはなぜかと言えば、如来はいつまでも世間に在ると思ってしまうからである⁽³⁰⁾。

そして、裕福な家の息子は財産がいつまでもあると思ってしまうので希有だという想いを抱かないが、貧乏人は貧困と困窮を捨てて楽と富を得ようと望むから、財産を得ようと精進努力するという二つの譬喩を説き⁽³¹⁾、最後に、

善男子よ、従ってこのような因と縁によって如来は世間に久しくは留まらず、速やかに涅槃されるのである。諸々の如来は具足した巧みな手段をもって、衆生たちを成熟されるのである⁽³²⁾。

と告げた後、四如来は姿を消す。

四如来から、如来の寿命が無量であることと、衆生利益のためにあえて涅槃を示現することを聞いた妙幢菩薩は、他の菩薩たちとともに靈鷲山に赴き、釈尊に詣でる。四如来も再び現れ、使者を派遣し釈尊に金光明經を説くことを要請する。勧請された釈尊は四如来を讃歎し、以下の偈を説く。

私は靈鷲山に在って、宝のようなこの經典を説いているが、多くの者たちを成熟させるために般涅槃をも示現するのである。

邪見を抱く凡夫たちは私の教えを信じようとしな。彼らをあまねく成熟させるために般涅槃をも示現するのである⁽³³⁾。

偈の内容は〈第三段階〉の総括となっているとともに、四如来によってすでに説かれていたものとほとんど同義である。釈尊に再説させることによって、四如来の説を釈尊自身も承認していることを示そうとしたものであろう。

このように〈第三段階〉は、〈第一段階〉で如来の寿命が無量であると説かれ、〈第二段階〉で如来は法身で遺骨は存在せず、衆生を利益するための手段として涅槃を示現すると説かれたのを受けて、寿命無量のはずの釈尊があえて短寿を示現した理由とされている衆生利益について、譬喩を援用して解説したものとなっている。仏陀の現存に関しては、靈鷲山で常に金光明経を説き続ける釈尊にその現存を確認している。なお、パーリ涅槃経では、説法こそしないものの、常に禪定に入り続けている釈尊に仏陀現存の確認が行われている⁽³⁴⁾。しかし同経では、釈尊があえて涅槃したのは長寿を正しく懇願しなかったアーナンダの過失であるとしており⁽³⁵⁾、涅槃の理由を衆生を哀れむ釈尊の慈悲に求める『金光明経』とは対照的である。

従来指摘されているように⁽³⁶⁾、『金光明経』の「如来寿量品」は『法華経』の第十五章「如来寿量品」と類似しており、特にこの〈第三段階〉においてその傾向が顕著に現れている。ただ、注意しておきたいことは、『法華経』「如来寿量品」に相当する内容・思想は、『金光明経』「如来寿量品」では〈第三段階〉に至って初めて表明されていることである。原初形、もしくは原初形に最も近い〈第一段階〉では、単に「如来の寿命は無量である」と説かれているに過ぎなかった。よって、思想の深化程度という観点から見たとき、原初形『金光明経』「如来寿量品」の方が『法華経』「如来寿量品」より素朴であると言える⁽³⁷⁾。

3.4. 〈第四段階〉(⑥⑦)

Suv_{c2} は〈第三段階〉までの発展であったが、*Suv_{t2}*、*Suv_{c3}* はさらに進んで〈第四段階〉まで発展した。しかし、最終段階である〈第四段階〉への発展

は、〈**第三段階**〉までの発展とはかなり方向性を異にしたものとなっている。一言で述べるならば、それは「經典としての発展」ではなく、思想の変容を伴った「論書としての発展」、もしくは「論書への転換」ということである。

⑥の冒頭で、妙幢菩薩は釈尊に次のように質問する。

世尊よ。そのように諸々の仏陀世尊が涅槃することなく、遺骨を世間に留めおかれることもごさいませんのなら、どうして様々な經典の中で“仏陀は涅槃してのち世間に遺骨を留めるので、人天の尊重と礼拝をもって、世間にある過去の諸仏世尊の遺骨に対し、人天を含めた世間は供養しなさい。そうすれば無量の福を得ることができるだろう”と説かれ、今ここでは“それら〔の遺骨〕は存在しない”と説かれたのですか。世尊が憐愍されて分別解説して下さるようお願いいたします⁽³⁸⁾。

この質問を受けた釈尊は、世尊が涅槃してのち世間に遺骨を留めおくというのは、密意説であると答える。そして、涅槃とは死ぬことではないということを強調し、十の法数を三回、合計三十に及ぶ涅槃の意味を整然と列挙するという内容になっている。

この⑥でまず奇異に感じられるのは、冒頭の妙幢菩薩と釈尊のやり取りである。妙幢菩薩は遺骨の存在・非存在に関する教説間の矛盾を釈尊に問いただし、釈尊が遺骨の留置は密意説であると答えることによってその非存在を宣言するわけであるが、この作業はすでに〈**第二段階**〉の⑤で周到かつ綿密になされている。言うなれば、遺骨に関する密意はすでに解かれているのである。

さらに特異なことは、法数を整然と列挙していくという説相である。また、その内容や使用語句も〈**第三段階**〉までのものとは一線を画すものとなっている。例を挙げてみよう。

諸々の如来は煩惱障と所知障を完全に断ち切っているから、涅槃していると呼ばれる⁽³⁹⁾。(涅槃の十法1-1)

アートマンもブドガラもなく、唯生滅の法からの転依を得ているので、

涅槃していると呼ばれる⁽⁴⁰⁾。(涅槃の十法2-5)

真實際は無戲論である。如来のみが真實際を証得し戲論が寂滅しているからこそ、涅槃していると呼ばれる⁽⁴¹⁾。(涅槃の十法2-8)

自己を渴愛する者は願欲を満たすため奔走する。願欲のために働く感覚器官が様々な苦を感受するのである。諸々の如来は“我がもの”という執著を断ち切り願欲を持たないので、涅槃していると呼ばれる⁽⁴²⁾。(涅槃の十法3-8)

上記引用例からも知られるように、この⑥では「涅槃」の意味が〈第三段階〉までとは異っている。〈第三段階〉までは涅槃は如来の死を意味しており、その理解のもとで仏陀の現存を確認していく作業が開始された。そして、涅槃の示現を衆生を利益する如来の方便・慈悲と捉えることで遺骨（仏塔）の意味を問い直し、無量の寿命を有する法身としての如来、及び教え（法）に仏陀の現存確認が行われた。しかし⑥では、〈第三段階〉までに至る作業の出発点であり、また常に中心的な関心事であり続けた「如来の死としての涅槃」を否定している。もちろん、涅槃が聖者の死だけでなく覚りや寂靜の境地を意味することもあるということは周知であるが、この⑥での涅槃の取り扱いから判断すれば、〈第四段階〉は〈第三段階〉までとは明らかに発展の方向性を異にしていると言える。〈第二段階〉の⑤ですでになされていた「密意を解く」作業を⑥においてやり直していることも、両者間における涅槃の意味の相違に起因すると判断される。

⑦に至ると、方向性の差異はさらに大きくなる。⑦の冒頭で釈尊は妙幢菩薩に次のように告げる。

さらにまた善男子よ。如来が涅槃しないことのみが希有なのではなく、さらに驚嘆すべき十種の法があるのである。それは諸々の如来の行い（如来行）である⁽⁴³⁾。

そして⑥と同様、十の法数で如来行を整然と列挙していく⁽⁴⁴⁾。この⑦では

⑥の場合とは違い、涅槃を〈**第三段階**〉までに見られた「如来の死」という意味で理解した上で、「如来は涅槃せず（死なず）常住な法身である」という、〈**第三段階**〉までの主要テーマ自体がさほど重要なものではないと述べているのである。

以上見てきたように、〈**第四段階**〉は〈**第三段階**〉までに至る経典発展の脈絡を離れ、⑥で涅槃に関する種々の見解を、⑦で如来の様々な行いを「分別解説」しており、形式的にも内容的にも論書としての役割を果たしていると言える⁽⁴⁵⁾。

発展の方向性の差異は、上記の「経典から論書へ」ということだけに留まらない。とりわけ重要なものは、如来の遺骨に対する態度の変容である。釈尊は十種の如来行を列挙した後、妙幢菩薩に次のように告げる。

善男子よ。これが諸々の如来応供等正覚の正行に関する無辺の説示であり、涅槃の真実の相であると知りなさい。別の時に涅槃及び遺骨を世間に留めると説いたのは、巧みな手段としての説示であって、衆生たちが〔遺骨を〕供養し恭敬するのも、如来の哀れみと善根の力によるものと理解しなさい。

遺骨を供養し恭敬する者は、未来世に八難を遠離し、諸々の如来と値遇し、善知識と出会い、菩提心を失わず、福が限り無く増え、輪廻から速やかに離脱し、輪廻の束縛に陥ることはない。〔このように遺骨崇拜は〕最高の行であるから、汝は怠ることなく勤修し続けなさい⁽⁴⁶⁾。

ここに至り、経説は〈**第三段階**〉までの脈絡から完全に逸脱してしまっている。先に筆者は「如来の遺骨に対する態度の変容」という言葉を用いたが、大乘仏教発展の歴史から見ると、むしろ「逆行」、 「退行」と表現した方がよりの確であろう。こうした如来の遺骨に対する態度の逆行、退行の背景には、大乘仏教誕生にも関わらず根強く残っていた仏塔信仰の影響が見え隠れする⁽⁴⁷⁾。

仏塔信仰からの脱却を目指した大乘仏教興起以来の目標は、『大雲経』及び『金光明経』において一度は完全な形で表明された。しかし後者においては、仏塔信仰への揺り戻しを伴う後代のさらなる増広発展を受けた結果、論書的方法の羅列によって覆い隠され、本来の姿は見失われてしまったのである。

3.5. まとめ

上記3.1.から3.4.までを簡略化してまとめる。

〈第一段階〉(①②)

如来の寿命は無量であるとして仏陀の現存を確認。寿命が無量であるのになぜ涅槃したのかについては触れていない。

〈第二段階〉(⑤)

涅槃と遺骨に関する密意を解き、如来の死と遺骨の存在を否定。法よりなる身体を有する常住な如来、及び遺された教法に仏陀の現存確認を行っている。釈尊の涅槃示現については、衆生成熟を理由に挙げる。

〈第三段階〉(③④)

衆生成熟の具体的理由・事例を提示し、〈第二段階〉までの経説を補強。常住な如来に仏陀現存の確認を行っていることは前二段階と同じであるが、釈尊が靈鷲山で常に金光明経を説き続けるなどと、より具体的な説明を施している。

〈第四段階〉(⑥⑦)

論書性格が強く、前三段階とは発展の方向性を異にする。前三段階における涅槃の意味、及び中心テーマであった如来常住を否定、もしくは軽視しているだけでなく、遺骨に対する態度にも逆行・退行が見られる。

4. 結び

『金光明経』「如来寿量品」は、〈**第一段階**〉では如来の寿命は無量であると説くだけのものであった。〈**第二段階**〉では『大雲経』からコンテキストを移動・借用し、法身常住、遺骨・仏塔供養における功德の否定、衆生利益のための涅槃示現を表明した。〈**第三段階**〉では前二段階の説を補強し、如来の常住に関して一層具体的な説示を行っている。〈**第四段階**〉は前三段階と比べると、発展の方向とテーマ及び形式等の様々な点で異質のものとなっている。論書的な性格が極めて強く現れてきており、遺骨に対する態度にも逆行・退行が見られた。

総じて、初期大乘経典には文学作品的傾向が強く見られるのに対し、中期以降の大乘経典には論理的、論書の傾向が顕著になってくる。『金光明経』「如来寿量品」はその発展過程全体を通じて、初期から中期以降へと進む大乘経典の変遷過程の模様をよく投影していると言える⁽⁴⁸⁾。文学作品的傾向が弱まり論書の傾向が強くなること、及び初期大乘仏教が目指した仏塔信仰からの脱却という目標が見失われて、反対に仏塔信仰側の思想が大乘経典を利用して表明されていること、これら二つの事象が相関している事実は非常に興味深い。

〈略号及び使用テキスト〉

- Suv* *Svarṇāprabhāsa* (『金光明経』).
Suv_S *Svarṇābhāsottamasūtra*, ed. J. Nobel, Leipzig, 1937.
Suv_T *Svarṇāprabhāsottamasūtra*, ed. J. Nobel, Leiden, 1944.
Suv_{T1} First Tibetan version of the *Suv.* (P No. 176)
Suv_{T2} Second Tibetan version of the *Suv.* (P No. 175)
Suv_{C1} First Chinese version of the *Suv.* (T. No. 663)
Suv_{C2} Second Chinese version of the *Suv.* (T. No. 664)
Suv_{C3} Third Chinese version of the *Suv.* (T. No. 665)

- MMS** *Mahāmeghasūtra* (『大雲經』)。
SP *Saddharmapuṇḍarīka* (『法華經』), ed. Kern and Nanjio, St. Petersburg, 1912.
MPS *Mahāparinibbānasuttanta* (パーリ涅槃經), *Dīgha-Nikāya* ii, 72-136, PTS.
P Peking Kanjur.
T. Taisho Shinshu Daizokyo.

- 1 鈴木 [1998b]。
- 2 鈴木 [1998a]。
- 3 本稿で使用したチベット文テキストは Nobel [1944] (*Suv_T*) を底本とし、諸版を参照して適宜訂正を施したものである。ロケーション表示には読者の便宜を考え、Peking 版を用いた。
- 4 Ruciraketu. *Suv_{C1}*, *Suv_{C2}* では信相という訳語が当てられているが、便宜上、*Suv_{C3}* で用いられている妙幢という訳語で統一する。
- 5 それぞれ Akṣobhya, Ratnaketu, Amitāyus, Dundubhisvara. *Suv_{C1}*, *Suv_{C2}* では阿閼, 宝相, 無量寿, 微妙声。
- 6 *Suv_{C1}* 335c17-336a10, *Suv_S* 6.1-9.5, *Suv_{T1}* 2b7-3b6, *Suv_{C2}* 360a27-b21, *Suv_{T2}* 161a3-162a2, *Suv_{C3}* 404b28-c26。
- 7 *Suv_{C1}* 336a10-b9, *Suv_S* 9.6-12.5, *Suv_{T1}* 3b6-4b4, *Suv_{C2}* 360b22-c21, *Suv_{T2}* 162a2-b8, *Suv_{C3}* 404c27-405a28. *Suv_{C1}* では一切衆が菩提心を発こし、四如来が消え去ったことを述べた上で「如来寿量品」を終了している。注 16 参照。
- 8 *Suv_{C2}* 360c22-361a29, *Suv_{T2}* 162b8-164a2, *Suv_{C3}* 405a29-c5。
- 9 *Suv_{C2}* 361a30-b24, *Suv_{T2}* 164a2-b4, *Suv_{C3}* 405c6-29。
- 10 *Suv_S* 12.6-19.10, *Suv_{T1}* 4b4-6b1, *Suv_{C2}* 361b25-362c9, *Suv_{T2}* 164b4-166a8, *Suv_{C3}* 406a1-c21. *Suv_S*, *Suv_{T1}*, *Suv_{C2}* では一切衆が菩提心を発こし、四如来が消え去ったことを述べた上で「如来寿量品」を終了している。なお、この⑤は『大雲經』が出典となっていることが明らかになっている。
- 11 *Suv_{T2}* 166a8-168b4, *Suv_{C3}* 406c22-407c4。
- 12 *Suv_{T2}* 168b4-170a8, *Suv_{C3}* 407c5-408a27。

13 仏陀滅後の存在確認をその中核としたと考えられている非大乘系涅槃經（下田 [1997] 60-81）とも対比させる。本稿では非大乘系涅槃經の中で、比較的標準的な内容を有するものとして、パーリ涅槃經（MPS）を用いることとする。

14 和訳は *Suv_s* に基づく（以下、注 15, 20, 26, 27 においても同様）。

善男子，汝今不應思量如来寿命短促。何以故。善男子，我等不見諸天世人魔衆梵衆沙門婆羅門人及非人，有能思算如来寿量，知其齊限。唯除如来。

（*Suv_{C1}* 336a14-18, *Suv_{C2}* 360b26-c1）

mā tvam kulaptraivaṃ cintaya/ evaṃ parittaṃ bhagavataḥ Śākyamuner
āyuhpramāṇam/ tat kasya hetoḥ/ na caivaṃ kulaputra taṃ samanupaśyāmaḥ
sadevake loka samārake sabrahmake saśramaṇabrāhmanikāyāṃ prajāyāṃ
sadevamānuṣāsūrāyāṃ yaḥ samarthaḥ syād bhagavataḥ Śākyamunes tathā-
gatasyāyuhpramāṇaparyantam adhigantum yāvad aparāntakoṭibhiḥ
sthāpayitvā tathāgatān arhataḥ samyaksaṃbuddhān/ （*Suv_s* 9.15-10.2）

rīgs kyi bu khyod 'di sñam du/ bcom ldan 'das Śākya thub pa 'di ltar sku tshe
thuñ ño sñam du ma sems śig/ de ci'i phyir ze na/ rīgs kyi bu de bñin gśeḡs pa
dgra bcom pa yañ dag par rdzogs pa'i sañs rgyas rñams ma gtogs par/ lha dañ
bcas pa'i 'jig rten dañ/ bdud dañ bcas pa dañ/ tshañs pa dañ bcas pa dañ/ dge
sbyoñ dañ bram zer bcas pa'i skye dgu dañ lha dañ mi dañ lha ma yin du bcas
pa'i nañ na/ bcom ldan 'das de bñin gśeḡs pa Śākya thub pa'i sku tshe'i tshad
kyi mtha'/ phyi ma'i mtha'i mu'i bar du yañ rtogs par nus pa ñed kyis su yañ
ma mthoñ ño// （*Suv_{T1}* 4a2-4, *Suv_{T2}* 162a6-8）

善男子，汝今不應思忖如来寿命長短。何以故。善男子，我等不見諸天世間梵魔沙門婆羅門等人及非人，有能算知仏之寿量，知其齊限。惟除無上正遍知者。

（*Suv_{C3}* 405a2-6）

15 一切諸水，可知幾滴，無有能數，積尊寿命。

（*Suv_{C1}* 336a24-25, *Suv_{C2}* 360c7-8）

jalārṇaveṣu sarveṣu śakyā gaṇitu bindavah/ na tu Śākyamuner āyuh śakyam
gaṇitu kenacit// （*Suv_s* 10.9-10）

rgya mtsho'i chu rñams thams cad kyi// thigs pa dag ni bgrañ bar nus//
Śākya thub pa'i sku tshe'i tshad// sus kyañ bgrañ bar mi nus so//

（*Suv_{T1}* 4a7-8, *Suv_{T2}* 162b3-4）

一切諸海水，可知其滴數，無有能數知，積迦之寿量。 （*Suv_{C3}* 405a13-14）

16 爾時信相菩薩摩訶薩，聞是四仏宣說如来寿命無量，深心信解歡喜踊躍。說是如来

寿量品時，無量無辺阿僧祇衆生，発阿耨多羅三藐三菩提心。時四如来忽然不現。

(*Suv_{C1}* 336b6-9)

- 17 tathāgatassa kho Ānanda cattāro iddhipādā bhāvītā bahulikatā yānikatā vatthukatā anuṭṭhitā paricitā susamāradhā/ so ākaṅkhamāno Ānanda tathāgato kappam vā tiṭṭheyya kappāvasesam vā/ (MPS 103.4-8). 中村 [1980] 66, 235, [1984] 299-303 参照。

もっとも、パーリ涅槃經には「作られたものは必ず壊れる。如来も涅槃する」(MPS 118.27-119.3) という記述も見られる。しかしその背景には、「如来はあえて命の素 (āyusamkhāra) を捨てた」(MPS 106.21-22) という考えのあることは看過できない。

- 18 下田 [1997] 77-81 参照。

- 19 如来身者金剛之數。意欲碎此身如芥子許，流布世間。使将来之世信樂檀越不見如来形像者，取供養之。因緣是福祐，当生四姓家，四天王家，三十三天，……自在天，他化自在天。……或復有得……阿羅漢道，辟支仏道。若成仏道，由此因緣故。

(T. Vol. 2, No. 125, 751a11-19)

- 20 aham asmiṃ Litsavikumāra bhagavataḥ pūjanāya bhagavataḥ sarṣapa-phalamātraṃ dhātum icchāmi …… sarṣapa-phalamātraṃ dhātum abhipūjayitvā tridaśādhipatyam labhyata ity evaṃ śrūyate/ …… ahaṃ te varam yāce yat sattvāḥ kṣipram eva tridaśādhipatyam pratilābhino bhaviṣyanti/

(*Suv_S* 13.3-14.6)

Liñ tsa byi gžon nu bdag ni bcom ldan 'das la mchod …… pa'i phyir/ bcom ldan 'das kyi riñ bsrel yuñs 'bru tsam la bsten par 'dod do// riñ bsrel yuñs 'bru tsam de mñon par mchod na/ sum cu rtsa gsum pa'i lha rnam kyi bdag po 'ba' žig 'thob ces grag go/……gañ …… sems can rnam myur du sum cu rtsa gsum pa'i bdag po thob par 'gyur ba'i……

(*Suv_{T1}* 5a1-4, *Suv_{T2}* 165a1-4)

善哉王子，我等願欲恭敬供養世尊之身，是故欲得如来舍利是芥子許。所以者何。如我所聞若善男子善女人，恭敬供養如来舍利，六天帝主富貴安樂必得無窮。……若善男子善女人得，……是人命終作六天主，受上妙樂不可窮尽。(Suv_{C2} 361c10-24)

童子，我欲供養無上世尊，今從如来求請舍利如芥子許。何以故。我曾聞說若善男子善女人，得仏舍利如芥子許恭敬供養，是人当生三十三天而為帝釈。……我今求，……命終之後得為帝釈，常受安樂。

(*Suv_{C3}* 406a12-26)

Suv_S と *Suv_{T1}*, *Suv_{T2}* とは必ずしも対応していない。鈴木 [1998a] 12-19 参照。

- 21 *Suv_S* 15.1-17.6, *Suv_{T1}* 5a7-b6, *Suv_{C2}* 361c28-362b4, *Suv_{T2}* 165a7-b7,

- Suv*_{C3} 406a29-b27. 鈴木 [1998b] 34, [1998a] 19-37 参照。
- 22 *Suv*_S 17.9-18.11, *Suv*_{T1} 5b7-6a4, *Suv*_{C2} 362b6-23, *Suv*_{T2} 165b8-166a5, *Suv*_{C3} 406c1-14. この「カウディニャ婆羅門の返答」の意味については、鈴木 [1998c] に詳しく論じてある。
- 23 *Suv*_S 19.1-4, *Suv*_{T1} 6a5-7, *Suv*_{C2} 362b27-c3, *Suv*_{T2} 166a7-8, *Suv*_{C3} 406c18-21. 鈴木 [1998c] 239-243 参照。
- 24 遺骨供養の奨励ではないが、仏陀の遺骨に関する奇跡はパーリ涅槃経にも見られる (MPS 164.8-14)。本稿冒頭に挙げた論理の枠組みを考えても、如来の涅槃・常住の問題に関して遺骨の話題が絡んでくるのは当然と言えよう。
- 25 その背景に、仏塔信仰からの脱却を目指した大乘仏教興起以来の目標があることは言うまでもない。
- 26 *anasthīrudhire kāye kuto dhātur bhaviṣyati/ upāyadhātunikṣepaṃ sattvānām hitakāraṇam//* (*Suv*_S 18.6-7)
sku la rus pa khrag med na// riñ bsrel yod par ga la 'gyur// sems can rnams la phan pa'i phyir// thabs kyis riñ bsrel g'zag par mdzad//
 (*Suv*_{T1} 6a2-3, *Suv*_{T2} 166a3-4)
 如是身者，非於血肉，云何而得，有於舍利。為化衆生，方便示現。
 (*Suv*_{C2} 362b17-19)
 仏非血肉身，云何有舍利，方便留身骨，為益諸衆生。
 (*Suv*_{C3} 406c11-12)
- 27 *na buddhaḥ parinirvāti na dharmāḥ parihyate/ sattvānām paripākāya parinirvāṇa darśayet//* (*Suv*_S 19.1-2).
sañs rgyas mya ñan yoñs (yoñsを訂正) mi 'da'// chos kyañ nub par mi 'gyur te// sems can yoñs su smin mdzad phyir// yoñs su mya ñan 'da' ba ston//
 (*Suv*_{T1} 6a5-6, *Suv*_{T2} 166a7)
 一切如来，不般涅槃，一切諸仏，身無破壞，但為成熟，諸衆生故，方便勝智，示現涅槃。
 (*Suv*_{C2} 362b27-29)
 仏不般涅槃，正法亦不滅，為利衆生故，示現有滅尽。
 (*Suv*_{C3} 406c18-19)
*Suv*_S の *darśayet* の読みに関しては鈴木 [1998c] 241 参照。
- 28 言語表現の決定要因が、その言語表現によって指示される対象の有無だけではなく、話し手の意図 (*prayojana*) にあるとする言語理論、及び仏教に本質的な意図性 (*ābhiprāyika*)、了義未了義 (*nitārtha/neyārtha*) の概念については、Ruegg [1989], [1990] に詳しい。
- 29 鈴木 [1998a] 4-5 参照。

30 和訳は注3に記したチベット文に基づく(以下同様)。

善男子，然彼釈迦牟尼如来顯示如是短少寿量。彼等衆生若知如来入涅槃已，發生苦想希有想未曾有想憂愁想，速当受如是等修多羅，当持誦誦，当不毀謗。是故如来顯示如是短少寿量。

彼等衆生若見如来不入涅槃，不生希有想憂愁想未曾有想，彼当不受如来所說諸修多羅，亦当不持誦誦。所以者何。謂常見故。(Suv_{C2} 361a2-9)

gžan yañ rigs kyi bu de bžin gšegs pa de mya ñan las 'da' ba bstan pas/ sems can rnams de la dkon pa dañ phrad par dka' ba'i 'du šes dañ mya ñan dañ sdug bsñal gyi 'du šes la sogs pa bskyed pas/ sañs rgyas bcom ldan 'das kyis gsuñs pa'i mdo 'di dag myur du 'dzin pa dañ klog pa dañ kun chub par byed pa dañ gžan dag la yañ rgya cher yañ dag par ston pa la skur ba 'debs pa med par 'gyur bas/ de'i phyir de bžin gšegs pas sku tshe thun bar bstan to//

de yañ de bžin gšegs pa rtag tu bžugs šin mya ñan las mi 'da' na/ sems can rnams gus pa med pa dañ/ phrad par dka' ba'i 'du šes kyañ mi bskyed pas/ de bžin gšegs pas gsuñs pa'i mdo zab mo dag 'dzin cin klog pa dañ kun chub par byed pa dañ/ gžan dag la yañ rgya cher yañ dag par ston par mi byed do// de ci'i phyir že na/ de ni bcom ldan 'das rtag tu 'jig rten na bžugs par 'dzin pa'i phyir ro// (Suv_{T2} 163a6-b2)

善男子，然彼如来欲令衆生見涅槃已，生難遭想憂苦等想，於仏世尊所說經教速当受持誦誦通利，為人解說不生謗毀。是故如来現斯短寿。

何以故。彼諸衆生若見如来不般涅槃，不生恭敬難遭之想。如来所說甚深經典，亦不受持誦誦通利為人宣說。所以者何。以常見仏不尊重故。(Suv_{C3} 405b9-15)

31 Suv_{C2} 361a9-19, Suv_{T2} 163b2-6, Suv_{C3} 405b16-25。

32 善男子，以是義故，如来不久住世速当涅槃。善男子，諸仏世尊如是方便善巧成熟衆生。(Suv_{C2} 361a27-29)

rigs kyi bu de bas na/ de bžin gšegs pa rgyu de dañ rkyen de'i phyir/ 'jig rten na yun riñ du mi bžugs šin myur du mya ñan las 'da' bar mdzad pas/ de bžin gšegs pa rnams ni thabs mkhas pa phun sum tshogs pa de lta bus sems can rnams yoñs su smin par mdzad do// (Suv_{T2} 164a1-2)

善男子，以是因緣，彼仏世尊不久住世，速入涅槃。善男子，是諸如来，以如是等善巧方便成就衆生。(Suv_{C3} 405c2-4)

33 我不離此山，常說此經宝。成熟衆生故，示現般涅槃。

凡夫染著見，不信我所說。彼等成熟故，我現般涅槃。(Suv_{C2} 361b21-24)

bya rgod phuñ po'i ri la ña bžugs te// mdo sde rin chen 'di ni 'chad mdzad
kyañ//skye bo mañ po 'di dag bsgral ba'i phyir// yoñs su mya ñan 'da' ba'añ
ston pa mdzad//

byis pa lta ba log par gyur pa rnams// ña yi bstan la mos par mi byed pa//
de dag kun tu bsgral ba'i don gyi phyir// yoñs su mya ñan 'da' ba'añ ston mdzad
do// (Suv₇₂ 164b3-4)

我常常在鷲山，宣説此經宝。成熟衆生故，示現般涅槃。

凡夫起邪見，不信我所説。為成熟彼故，示現般涅槃。 (Suv₇₃ 405c26-29)

34 下田 [1997] 69-72 参照。

35 MPS 115.25-34 ほか。

36 金岡 [1980] 61-62, 69 参照。

37 ただし、この「思想の深化程度」という観点から見た結果をもとに、さらに両者の成立時期の先後問題にまで考察を進めていく必要はないだろう。詳細は別稿に譲らねばならないが、『大智度論』に引用されているかどうかという事実を措いても、『法華経』には様々に分化・分派した教えやイコンを再統一しようという意図が強く作用しており、無量の寿命を有する如来も、統一された教えとイコン（特に仏塔）の永遠性に基いて表明されたものと考えられる。それに対して『金光明経』は懺悔を中心思想としており、懺悔を未来永劫有効なものとするため、罪の告白を受ける対象としての如来の寿命が無量である必要性が生じ、そのために、無量の寿命を有する如来という仏陀の現存確認方法を余所から導入したものと思われる。章名の類似（『法華経』では *Tathāgatāyuspramāṇaparivarta*、『金光明経』では *Tathāgatāyuhpramāṇanirdeṣaparivarta*。漢訳はいずれも「如来寿量品」）から推察すれば、最初の導入元が『法華経』である可能性は十分考えられる。なお、『法華経』においても、「如来寿量品」に続く第十六章「分別功德品 *Puṇyaparyāyaparivarta*」では、「如来寿量品」を *Tathāgatāyuspramāṇanirdeṣa* と呼んでいる (SP 327.1, 327.3, 332.6, 333.1, 337.3, 337.9)。

38 bcom ldan 'das de ltar sañs rgyas bcom ldan 'das de dag mya ñan las mi 'da'
la/ riñ bsrel 'jig rten du bžag pa yañ ma mchis na/ ci'i slad du mdo sde dag las/
sañs rgyas mya ñan las 'da' žiñ/ riñ bsrel 'jig rten du bžag pa la lha dañ mis gus
pa dañ bcas/ bkur bsti dañ bcas pas 'das pa'i sañs rgyas bcom ldan 'das rnams
kyi riñ bsrel 'jig rten du bžag pa la lha dañ mir bcas pa'i 'jig rten gyis mchod
pa byas na/ bsod nams dpag tu med pa 'thob bo (po を訂正) žes kyañ gsuñs la/
da (ña を訂正) 'dir ni de dag med do žes kyañ gsuñs pa de ji lta bu lags// bcom

ldan 'das thugs brtse bas rnam par dbye žin bśad par gsol//

(*Suv*_{T2} 166b1-4)

世尊，若實如是諸仏如来不般涅槃無舍利者，云何經中說有涅槃及仏舍利，令諸人天恭敬供養。過去諸仏現有身骨流布於世，人天供養得福無辺。今復言無，致正疑惑。惟願世尊，哀愍我等，広為分別。

(*Suv*_{C3} 406c24-29)

39 de bžin gśegs pa rnams kyis řnon mońs pa'i sgrib pa (*kleśāvaraņa) dań/ řes bya'i sgrib pa (*jñeyāvaraņa) yońs su spańs pas mya řan las 'das pa řes bya ba dań/

(*Suv*_{T2} 166b7-8)

諸仏如来，究竟断尽諸煩惱障所知障故，名為涅槃。

(*Suv*_{C3} 407a5-7)

40 bdag dań gań zag med ciń skye ba dań 'gag pa'i chos tsam las gnas 'pho ba (*āśrayaparāvrtti) thob pa'i phyir mya řan las 'das pa řes bya ba dań/

(*Suv*_{T2} 167b1-2)

無有我人，惟法生滅得転依故，名為涅槃。

(*Suv*_{C3} 407a27-28)

41 yań dag pa'i mtha' řid ni spros pa med pa (*niśrapańca) de bžin gśegs pa řag gcig gis yań dag pa'i mtha' mńon du gyur ciń spros pa ře bar ři ba de řid la mya řan las 'das pa řes bya ba dań/

(*Suv*_{T2} 167b4-5)

實際之性無有戲論。惟独如来証實際法，戲論永断。名為涅槃。

(*Suv*_{C3} 407b2-4)

42 gań sred pa'i bdag řid can ni tshol ba la nan tan byed do// tshol ba la nan tan byed pa'i dbań gis/ sdug bsńal rnam pa sna tshogs myoń bar 'gyur ro// de bžin gśegs pa rnams ni/ bdag gir 'dzin pa yońs su bcad ciń tshol ba mi mńa' bas mya řan las 'das pa řes bya ba dań/

(*Suv*_{T2} 168a8-b1)

若自愛者，便起追求。由追求故，受衆苦惱。諸仏如来除自愛故，永絶追求。無追求故，名為涅槃。

(*Suv*_{C3} 407b25-28)

43 gžan yań rigs kyi bu de bžin gśegs pa mya řan las mi 'da' ba de 'ba' řig (řig を訂正) no mtshar che ba ma yin gyi/ gžan yań no mtshar du bya ba'i chos rnam pa bcu yod pa de ni de bžin gśegs pa rnams kyi spyod pa'o//

(*Suv*_{T2} 168b4-5)

復次善男子，豈惟如来不般涅槃，是為希有。復有十種希有之法。是如来行。

(*Suv*_{C3} 407c5-6)

44 一例を挙げる。

如来は“村や都城や村落に赴いて，王や大臣や婆羅門や王族や商人や奴隸などの家で乞食しよう”とは考えない。さりながら，昔からの身口意の〔三〕行の慣習の力によって，無功用に乞食し利益をもたらす。それが如来行である。(如来行4)

de bžin gšegs pa groñ dañ groñ khyer dañ groñ 'dab tu gšegs śiñ/ rgyal po (*rājan) dañ/ blon po (*amātya) dañ/ bram ze (*brāhmaṇa) dañ/ rgyal rigs (*kṣatriya) dañ/ rje'u rigs (*vaiśya) dañ/ dmañs rigs (*śūdra) la sogs pa'i khyim du bsod sñoms (*piṇḍa) blañ no sñam du mi dgoñs mod kyi/ sñon gyi sku dañ gsuñ dañ thugs kyi spyod pa la goms pa'i mthus lhun gyis grub par bsod sñoms la gšegs śiñ phan pa'i don mdzad pa de ni/ de bžin gšegs pa rnams kyi spyod pa'o// (Suv_{T2} 169a2-4)

仏無是念。我今往彼城邑聚落，王及大臣婆羅門殺帝利薛舍伐達羅等舍，從其乞食。然由往昔身語意行慣習力故，任運詣彼，為利益事而行乞食。是如来行。

(Suv_{C3} 407c17-21)

45 <第三段階>の増広時には、すでに『金光明經』に「分別三身品」が編入されている。「分別三身品」の編者が瑜伽行派の学説と、そしておそらく『宝性論』の所説をも踏まえていることは明らかなので、<第三段階>より遅れる<第四段階>において論書性格がさらに色濃く出てくることにも不思議はない。また、大乘經典の持つ特徴として、伝統的な三蔵の枠を壊して、經典が単独で經・律・論の三蔵としての役割を果たす場合があることもすでに明らかにされている。高崎 [1974] 347, 下田 [1997] 427-428 参照。

46 rigs kyi bu 'di ni de bžin gšegs pa dgra bcom ba yañ dag par rdzogs pa'i sañs rgyas rnams kyi yañ dag pa'i spyod pa mtha' med par bstan pa dañ/ mya ñan las 'das pa yañ dag pa bden pa'i mtshan ñid du šes par gyis śig/ skabs gžan dag tu mya ñan las 'da' ba dañ/ riñ bsrel 'jig rten du bžag ces bya ba de ni thabs mkhas pa bstan pa ste/ sems can rnams kyi mchod pa dañ rim gro byed pa de dag kyañ de bžin gšegs pa'i thugs rje dañ dge ba'i rtsa ba'i mthu yin par blta bar bya'o//

de la gañ žig mchod pa dañ/ rim gro byed pa de ni/ ma 'oñs pa'i dus na mi khom pa bryad (*aṣṭākṣaṇa) yoñs su spañs te/ de bžin gšegs pa rnams dañ phrad ciñ dge ba'i bšes gñen dañ ldan pa dañ byañ chub kyi sems mi stor ba da ñ bsod nams dpag tu med pa 'phel ba dañ 'khor ba las myur du 'da' žiñ 'khor ba' i 'chiñ bas glags par mi 'gyur ba'i spyod pa dam pa 'di yin pas/ khyed kyis nan tan du bsgrub ciñ g-yel ba med par bya'o// (Suv_{T2} 169b7-170a3)

善男子，如是当知，如来应正等觉説有如是無辺正行。汝等当知，是謂涅槃真實之相。或時見有般涅槃者，是權方便。及留舍利，令諸有情恭敬供養。皆是如来慈善根力。

- 若供養者，於未來世遠離八難，逢值諸仏，遇善知識，不失善心，福報無辺，速當出離，不為生死之所纏縛。如是妙行，汝等勤修，勿為放逸。（*Suv*_{C3} 408a12-20）
- 47 鈴木 [1998b] 35-36 参照。
- 48 原初形『金光明經』が初期大乘經典であると言うのではなく、あくまで傾向から見ての考察である。

参考文献

- 金岡秀友 [1980] 『金光明經の研究』，東京：大東出版社。
- 下田正弘 [1997] 『涅槃經の研究』，東京：春秋社。
- 鈴木隆泰 [1998a] 『金光明經 如来寿量品』と『大雲經』，『東文研紀要』135, 1-48。
- [1998b] 『大雲經』の目指したもの，『インド哲学仏教学研究』5, 31-43。
- [1998c] 大乘經典編纂過程に見られるコンテクストの移動ー〈如来の遺骨に関する対論〉を巡ってー，『東文研紀要』136, 227-253。
- 高崎直道 [1974] 『如来藏思想の形成』，東京：春秋社。
- 中村元 [1980] 『ブツダ最後の旅』，東京：岩波書店。
- [1984] 『遊行經 上』，東京：大蔵出版。
- Nobel, J. [1937] *Svarṇabhāsottamasūtra, Das Goldglanz-sūtra. Ein Sanskrittext des Mahāyāna-Buddhismus. Nach den Handschriften und mit Hilfe der Tibetischen und Chinesischen Übertragungen*, Leipzig.
- [1944] *Svarṇaprabhāsottamasūtra, Das Goldglanz-sūtra. Ein Sanskrittext des Mahāyāna-Buddhismus. Die Tibetischen Übersetzungen mit einem Wörterbuch*, Leiden.
- Ruegg, D. S. [1989] *Buddha - nature, Mind and the Problem of Gradualism in a Comparative Perspective*, University of London.

金光明経如来寿量品の発展過程より見た如来の寿命と遺骨

[1990] Allusiveness and Obliqueness in Buddhist Texts,
Publications de l'Institut de Civilisation Indienne 55,
Paris.